

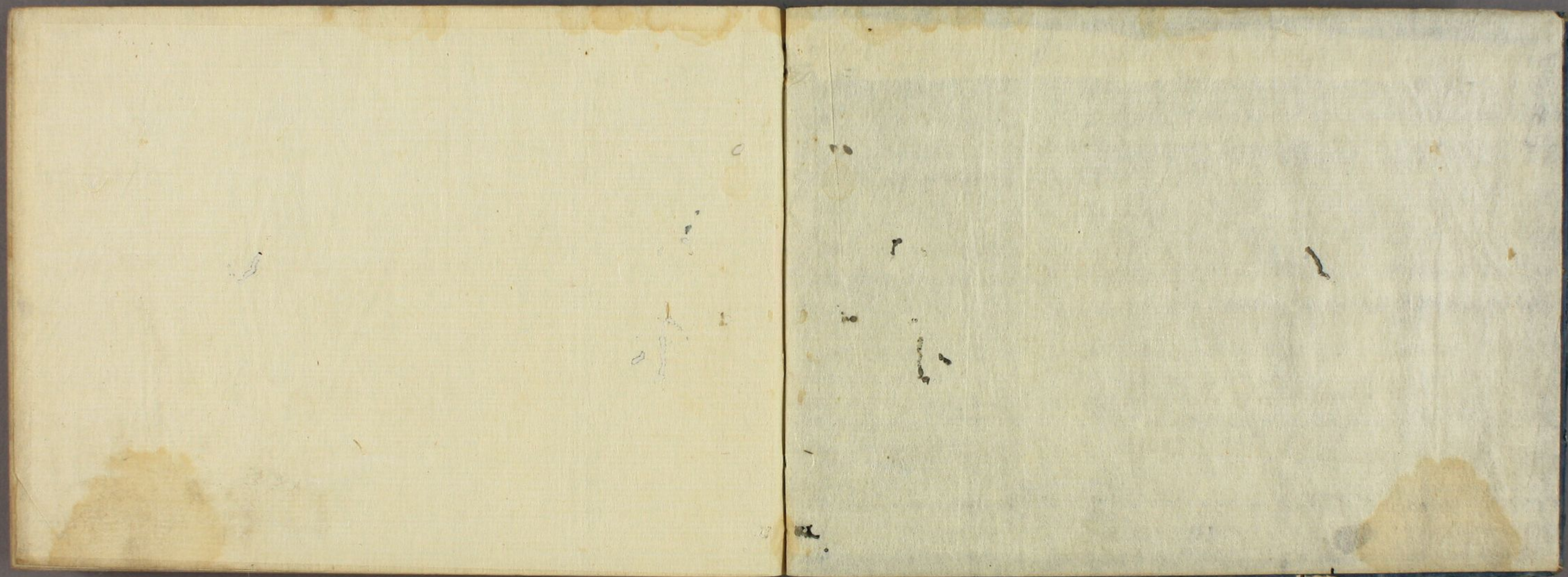


伊地知文庫  
文庫20  
1  
4

十六一廿









菴玖波集卷第十六

雜連歌五

竹工おや子乃名やまゝるん

二之法親王

ねあゝゝのろはは母の法を

この身とあゝゝのろはは母の

園白茶丸丸丸

とまゝゝゝゝおもてあけ親後

おもてあけゝとまゝゝゝ

茶丸丸丸丸丸丸

とまゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ





善定國師

子身才多心してこそは  
かゝるて養育せしむる

柱石物も良き

よみ方なくも世を  
人として心ね宿めり

法親王

山けりおもひてこそは  
是れこそこそこそ

法親王

うき世つらね人み  
源氏心石と獄おも

かゝるてこそこそこそ

法中物も定資

世に世りもやこそは

法親王

推してこそこそこそ  
前大物もこそこそ

こそこそこそ

いふこそこそこそ

源義實

こそこそこそこそ  
まゝこそこそこそ



大正加經

於此身やうき世と方とを  
福のいふ義の身をも相合

龍阿上人

今もておもふも老もつた  
まとの心もいふも其の心

良尊法師

丁もてあまもつたもつた  
世のまもつたもつた

善何法師

御もつたもつたもつた  
心もつたもつたもつた

仙の法師

世をいふもつたもつた  
常経をいふもつたもつた

相もつたもつたもつた  
いふもつたもつたもつた

源忠長

心もつたもつたもつた  
向もつたもつたもつた

源忠長

七もつたもつたもつた  
あもつたもつたもつた

龍阿法師



新居のついでに世と知る  
ついでにやうにせよ

本原法郎

定帳のうらをよき世あり  
判らざるもよのよき世あり

源有子

移り世のありしを志す  
志すに任じしを

源氏頼

今もついでにす  
月と一にやる如し

叔母法郎

たふす世にけしむは  
ついでに七世といふ

順多法師

こころのよき世あり  
ついでに七世といふ

寛胤法親王

徳家の心をうけつた  
ついでに七世といふ

有原法郎

徳家のついでに  
ついでに七世といふ

法眼村志







才とわくしを帯ふる  
任人もあつたよの庵り  
有る原なる者

うまけりよの身をしつる  
うま世なるすまをの他  
有る原なる者

と身の望みのまもも同  
夕社の向うてあつる者

神カ情  
身と志るし海人より七社  
勝法師

うま容なる者あつるもの  
うま

人うまあつる別事  
村うま信の持宗

命を老めうまを  
村うまわあつるもの

有る世うまを  
有る世うまを

法印殿  
うまをうまを

人のしらぬ者  
うまをうまを

あまはうまをうまを



うき経事しつ後世

性善法師

有る人ありて先の世に

園白内名に傳ふる脱家

のみこと

多しとていふらうりねき

梅原法師

先ねきしといふけりて

はなすよ庵へ山あつて

有る長春

捨つる文とていふて

今世もいふとていふ

平親密

捨つる可きとていふ

考より名とていふ

常徳寺の前の政大

よまふ人といふ

いつくは山といふ

二二法師王

中といふとていふ

人といふとていふ

平冬法師

今世にいふとていふ

つる身といふとていふ



鹿阿上人

おや子とあはれりありあらず  
未年をせやあけく敬病

前年助を定済

あまふたのころしき相合  
ともあはれりあけく敬病

梅舟法師

あつて世人ともまこと  
回不社めしつたふり

右左衛門少輔

あまふたのころしき相合  
十一あつて七れりあらず

良阿法師

あつて世人ともまこと  
あまふたのころしき相合

安徳力伝

あまふたのころしき相合  
あまふたのころしき相合

相阿法師

あまふたのころしき相合  
あまふたのころしき相合

荒木田長光

あまふたのころしき相合  
あまふたのころしき相合







えんじのいしを称おふ忠を  
陸奥のそと七何たるねん  
松平信成永遠

やあまを庫みあつるけつは  
二品法親王

信守をい其のむを七何たるねん  
いのらおふんしあをい  
十仏法郎

老の屋やうらうらあまをい  
はらうのあまをい  
歌英法郎

いんをいあまをい

有原信真

柴のそとあまをい  
應保二年此月の夜法性  
乃の園白女御女房とて  
いん月使信りつる  
信のそとあまをい  
乃の園白女御女房とて  
乃の園白女御女房とて  
乃の園白女御女房とて  
乃の園白女御女房とて



権の位の中宮さうさくを  
おぼろしききつて降る又  
の御まはけのりくのをさる  
ふさすすさのみるありら  
さうさくのみつてさす  
のさうさくさくさくさく  
せきさくさくさくさく  
さくさくさくさくさく

上人の知

まゆりさくさくさくさく

有原義孝

さくさくさくさくさく

名位あるの通乃松丸

前よりゆきさく

降泉の庵をたのむさく

降いさくさくさくさく

降冬法郎

さくさくさくさくさく

あさくさくさくさく

有原長泰

月と花さくさくさく

かさくさくさくさく

周阿法師

山と月さくさくさく



人々を導く御宗しと云ん  
國白前ん去れ

うき身よりあつみのなきあつ  
も同もいれぬの心とあらうら  
二心法親王

少りのおやの中のみこり子  
おまおころより身とて推せ  
前大物そら氏

存命といりうらまも有  
二心とてつととしる紫の庵  
本海法師印

任しりらもらうまもるん

身と推しやめつとてあつ

高き法師

山とみ方りうとての程を

た向し書とて似れはあれ

素何法師

推しより身と推すのみとて

人いしりらもらうまもるん

十心法師

すくくいしそしとてあつ

あやうとてうらまもるん

有る心宗書

二心とおもはれしとてあつ



院のいふもあつて本位

有原秀氏

紫のめめいれ松のまよふを

もしの身あつてあつてあつて

乃身名を法師

推世あつてあつてあつてあつて

身と終てあつてあつてあつて

松樹法師

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

園白前大老

身の上とあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

後徳織信のあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて



前中初之具行

其一の儀よりあつり弟の  
神今念ふにうらふ人と  
をて有りしあつし其  
とよと少くも徳をおこ  
もふゆらるるや

菟玖波集卷第十七

羈旅連歌

関白内大臣の御公の殿  
御

うらまへしうらまへし  
とよと

救済法師

松原の御寺に千も旅の  
あつし月を千もあつし

信照法師

旅のうらまへしうらまへし  
旅のうらまへしうらまへし  
あつし松原

厚冬法師

あつし松原を思はれてあつし



昨日の事... 乃... 云

園白前左大臣

春の事... 乃... 云

山を乃... 乃... 云

中... 乃... 云

乃... 乃... 云

乃... 乃... 云

前左大臣

乃... 乃... 云

乃... 乃... 云

乃... 乃... 云

乃... 乃... 云

乃... 乃... 云

乃... 乃... 云

乃... 乃... 云

乃... 乃... 云

乃... 乃... 云

乃... 乃... 云

乃... 乃... 云

乃... 乃... 云

乃... 乃... 云

乃... 乃... 云



世もや乃あまのりて風ある  
海神宗位

旅行の月をこころまじりて

月とてあまのあまのこころ

有原高秀

人より旅の月を枝うと母

旅の月をこころまじりて

梅野法印

志まじりてあまのあまのこころ

松風とほりてこころまじりて

有原高秀

旅の月をこころまじりて

とよみと人とも旅の月をこころ

平高業

あまのあまのあまのあまのこころ

ゆきと人とも旅の月をこころ

梅野法印

月よりあまのあまのあまのこころ

あまのあまのあまのあまのこころ

有原高秀

あまのあまのあまのあまのこころ

あまのあまのあまのあまのこころ

梅野法印

月よりあまのあまのあまのこころ



初より高きこと共々  
十仙法師

七の月より八月の月  
丁の月より八月の月  
乃智法師

より八月の月より九月の月  
乃智法師  
乃智法師

月より八月の月より九月の月  
乃智法師  
乃智法師

張とあとのつらさ

乃智法師

より八月の月より九月の月

乃智法師

乃智法師

張のあとのつらさ

乃智法師

乃智法師

有明と夜に乃智法師

乃智法師

乃智法師

月と夜に乃智法師



又和三年六月世間志あり  
其事ありし善徳心は徳と  
し事行有るし徳と  
同七月より所し徳と  
作し

とまのこころ松の丸  
園白前丸大丸

徳と有るありそふら  
おろしあり  
まらえしそふら  
乃何し徳と有るあり  
あやうらふとこころ

常徳法印

跡に依り徳と有るあり  
ありし徳と有るあり  
法印定し

徳智孝康

花ありしありし徳と有るあり  
徳と有るありし徳と有るあり  
ありし徳と有るあり  
徳と有るありし徳と有るあり  
ありし徳と有るあり

本もちしとありし徳と有るあり  
山ありしとありし徳と有るあり



幸山や雲のあはれを  
二心法親王

あはれは申さるゝあはれ  
丁しゆのあはれは山内の方

梅舟法師

あはれは申さるゝあはれ  
あはれは申さるゝあはれ

梅舟法師

あはれは申さるゝあはれ  
あはれは申さるゝあはれ

梅舟法師

あはれは申さるゝあはれ  
あはれは申さるゝあはれ

あはれは申さるゝあはれ  
あはれは申さるゝあはれ

あはれは申さるゝあはれ  
あはれは申さるゝあはれ

あはれは申さるゝあはれ  
あはれは申さるゝあはれ

あはれは申さるゝあはれ  
あはれは申さるゝあはれ

あはれは申さるゝあはれ  
あはれは申さるゝあはれ

梅舟法師

あはれは申さるゝあはれ  
あはれは申さるゝあはれ



平光寺

園亭の傍にありてやわらわらわら  
まじりてあつたきまじりて人

石原信親の墓

川舟の上を望む所は月と  
くしねのまじりてあつた

性善法師

性善法師の墓とてありて  
おもしろくもあつた

前中納言の墓

前中納言の墓とてありて  
えきやうとてあつた

えきやうの墓とてありて  
あつた

あつた  
あつた

後二位の墓

山路の傍にありて  
あつた

近中納言の墓

近中納言の墓とてありて  
あつた

二心法師

二心法師



山越乃東の海に如く  
物と人との目とれを  
身名を法師  
あつたに河をさつて  
おつたに河をさつて  
本法師法師  
おつたに河をさつて  
源法師  
おつたに河をさつて  
法師  
法師

身の名もどつたに河を  
あつたに河をさつて  
祝の法師  
あつたに河をさつて  
法師  
あつたに河をさつて  
法師  
あつたに河をさつて  
法師  
あつたに河をさつて  
法師



縁糸乃申人子宿るるに  
くともしるふ事あり  
考智法師

申すも申すも宿るるに  
を道ありとも誰と  
若木田七郎

善く行山申す乃ら  
縁糸申す又まうら  
若原花高

若くも古所人々  
くしりも晴と志  
若原花高

縁糸申すも宿るるに  
くともしるふ事あり  
考智法師

申すも申すも宿るるに  
を道ありとも誰と  
若木田七郎

善く行山申す乃ら  
縁糸申す又まうら  
若原花高

若くも古所人々  
くしりも晴と志  
若原花高

源脱秀



凡そまゝの山の中を張師  
まゝの形やもせぬ張人  
有原高直

多乃名のみつゝせ山とせらる  
うつても人のつゝまゝなり  
前ふ柳も高直

張師もそ七ねとせらる  
ね乃くけりりはやりん  
梅師法印

川紀乃海といつゝもそつゝ  
法乃上も法乃なり  
有原俊弘

人傳此川舟と馬はて  
先立伝とよもそそそ人  
二品法親王

川紀乃のらおろし張の社  
舟と法乃とらとら  
よもそそ

水乃ま川のみまそそ  
又たん人やこもそそ人  
高階重成

海乃ま河のみまそそ  
うもそそ  
平維也



らるる縁の事も何れもなきに  
縁乃ち宿るも人の懐くまあり

因何法師

夕暮のまらるるも何れもなきに  
いづれも柱乃ちけりあり

社何法師

逢人ともあそびの母のらるる  
ともやむ水やそよそよあり

有原の翁

吾よみ以てふらるるも川ぞし  
そ乃ちねをそよ縁のまき

是情法師

いづれも風を母法ありき  
月の夜もそよそよあり

惟宗親孝

母のや縁の事も何れもなきに  
こころもそよそよ縁の行末

源師義

いづれもそよそよ浦の夜も  
去りしともそよそよ月やまらるる

源打を

あそびもそよそよのそよそよあり  
あそびもそよそよのそよそよあり

有原の翁



浦上有りて...  
いしとせりし...  
教専法師

教専法師

つらね...  
つらね...  
つらね...

つらね...  
つらね...  
つらね...

つらね...  
つらね...  
つらね...

つらね...  
つらね...  
つらね...

つらね...  
つらね...  
つらね...

つらね...  
つらね...  
つらね...

つらね...  
つらね...  
つらね...

つらね...  
つらね...  
つらね...

つらね...  
つらね...  
つらね...

つらね...  
つらね...  
つらね...

つらね...  
つらね...  
つらね...

つらね...  
つらね...  
つらね...

つらね...  
つらね...  
つらね...

つらね...  
つらね...  
つらね...

つらね...  
つらね...  
つらね...

つらね...  
つらね...  
つらね...

つらね...  
つらね...  
つらね...

つらね...  
つらね...  
つらね...

つらね...  
つらね...  
つらね...

つらね...  
つらね...  
つらね...

つらね...  
つらね...  
つらね...

つらね...  
つらね...  
つらね...

つらね...  
つらね...  
つらね...

つらね...  
つらね...  
つらね...



月夜乃十のころ  
有原信真  
春信雅経し律の  
鴨長明  
一巻乃中より別い

法眼長修  
乃中より別い  
法眼長修  
乃中より別い  
乃中より別い



有原知春

少の程乃け行たあひん  
とあふより北より

仁教法師

とびそし縁か人乃ん  
きくかやりのそそ

神古良嗣

不のそそ乃あそ  
とりのそそ

乃彦法師

寺道と山法師のそそ  
少程社子向のそそ

うへにけし川方也か

二品法師

仁とそそ乃あへ  
つとえ社の内

前乃助

とんら仁とそそ  
出恒のそそ

源乃宣

字の程らと仁  
とそそ

園白家

仁とそそ  
とそそ



此の方をもつておれ稽察  
後深法師の御心  
守持しけりおれ弘人  
つとめおれ松の御心  
清原重房の御心  
乞ふまゝの御心  
此の御心をもつて  
若くは御心  
行はれどもおれ御心  
高つた御心  
後深法師の御心  
仲仲とつておれ御心

よりの御心  
延二位の御心  
駒越の御心  
おれ御心  
若くは御心  
おれ御心  
二心法親王  
この御心  
おれ御心  
東よりおれ御心







建保三年四月庚午

額正寺

從二位少輔

まへ志し海らもあけぬま街  
いしおしんまの縁人

前左衛門少輔

まへ志し海らもあけぬま街  
いしおしんまの縁人

前左衛門少輔

まへ志し海らもあけぬま街  
いしおしんまの縁人

前左衛門少輔

まへ志し海らもあけぬま街  
いしおしんまの縁人

又三條りまそやま

前右衛門少輔

まへ志し海らもあけぬま街  
いしおしんまの縁人

前右衛門少輔

稱阿上人

まへ志し海らもあけぬま街  
いしおしんまの縁人

前右衛門少輔

常忠法師

まへ志し海らもあけぬま街  
いしおしんまの縁人

前右衛門少輔

素阿法師

まへ志し海らもあけぬま街  
いしおしんまの縁人



おまごや〜〜〜法世のた  
有原法有

〜〜〜と夜世  
有原親長がた

〜〜〜  
刑今〜〜〜  
法眼村産

法依乃末の件〜〜〜  
相〜〜〜  
〜〜〜  
〜〜〜

家〜〜〜  
〜〜〜

丸あ〜〜〜  
〜〜〜

〜〜〜  
〜〜〜

陽〜〜〜  
〜〜〜  
法依法師



うかりし中く 穢の如き  
山に下りてあり ありあり風

性善法師

夜にう短く 天を月とて  
いと静き ときこらわ

順之法師

うららかに 河をうらむ  
うらむらりし 穢の如き

高之法師

波にやま川 瀬の如き  
二と三と ありあり法が如

如何法師

こころ 穢もやまら  
穢くとも ありあり

二心法師

行にあり ありあり  
むらみ ありあり

本法師

うらむらり ありあり  
ありあり ありあり

従二位法師

ありあり ありあり  
ありあり ありあり  
ありあり ありあり



法多相傳心口觀

二高こころとくそとくそく謙人  
あまりよあく謙と出ね

信毎能れ

高のちせまの戸力りまき  
都とくつるる左の也い法

陸社法部

如く又あつ謙許しゆるす  
まねいし昨あともまねいね

梅原法部

謙人こころヤしりゆる  
とくよのこころとくらん

有原教言能れ

あまねあまゆり謙の  
まねいし出八月の謙と

新英法部

いこころあやけらるる  
月のあまねあまね園す

岩智法部

こころいしとく謙人のこころ  
起すいしとく謙人のこころ

茶之助忠信

いこころあまねあまね  
梅原法部



二社ハ縁のり光のりもあ  
やまのりふれや秋のり

善何法師

跡平よりあつて世末のり  
よんよりも二あつても二

源宗氏

とそをすましあつて武  
さしくあつてあつてのり

信照法師

時あつてあつてあつて  
行末のりあつてあつて

平景清

別あつてあつてあつて  
とあつてあつてあつて

禪源法師

あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて

有原肥能

あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて

性嚴法師

あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつて







摩訶止観法部

初て七中先んてうんてん経より  
論をきくして臨空宗を

よくたふさぐべし

よきうんてんてんてんてん

高麗の法

情思障月を明照してせき

人下りつて七中をわ別を

良心法部

よくよくよくよくよくよく

子句のまじりの中へ

少くもまじりてよくよくよく

居士法部

くらむ心で縁のたふせを

よくよくよくよくよくよく

有る法部

有る法部のまじりてよくよく

答ふては法部のまじりてよく

前中抑えて定を

よくよくよくよくよくよく

乾之てんを月内表を

よくよくよくよくよくよく

後二条の法部



形つてゆらも縁乃ららふ世  
花千もまゆゆく社をな  
後多初任の如き

孝子一人志りしこと  
山法の日めくこと  
前ふゆき高氏

縁和社行しゆり  
名しやゆゆら社  
永源法親王

いづくもしやうこと  
玉子のみ文字を  
源氏権

そら七まより乃縁の  
誰よりやとらら  
福永法師

久しき縁のつて  
あま志をねら  
南仏法師

縁よりま同乃  
といやつて  
信昭法師

物よりまやま  
衣よりあし  
とのり縁ゆめ



をきいてはあつていふていふ

聖賢法部

去るね路の末にまはるのめい

あつていふていふ

右法法部

差違するも神の紅の夜毎

ついでにうりむる家も有る

三良何法

紅のあつて夜もす火の川を

おく山あつて庵やあつて

二心法親王

行くも縁もいふていふ

ついでに海もいふていふ

あつていふていふ

梅原法部

えいといふていふ

いふていふ

園白法部

いふていふ

いふていふ

人

いふていふ

いふていふ

云句

いふていふ

いふていふ



あゝ道うゝゝゝゝ

菴玖所集卷第十八

加久平

正月一つむらぬゝゝゝ

せぬあけら

天曆

あゝゝゝゝゝ

ゆる白し休也なゝり四入  
の比百額生うゆるん

休也

長乃あつゝゝゝゝ  
流る羽伝ゝゝゝ

そりあせ

時あれしせゝるすゝ

源流長

ゝゝゝゝゝゝゝ

君乃ゝゝゝゝ

茶之助

上平七おゝゝゝ



君としてこそ人七何んか  
この心製

よるね神乃可もいんを

初唐四三子七月内書

しこころを存せや信

前之政ふれ

車乃もさこのりそり思

神のりいかに石屋泉

身冬法郎

今りも人のよるも

こりあさもささし

枚所法郎

勅あやし名もささし

似あさやつるの梅

善向法郎

子多さあさし

住して二二可し竹園

二心法親王

そのあささあさし

まかむしの信

前入助ささ氏

と七ささあさ家

由雅集えん

二万報事







とら方のひとと人いりて  
源頼光

位人ていしんしんをたけん  
玉くあまをいせをいせ

良何法師

くちりあふ月いこのやこん

きけいあふいせをいせ

十仏法師

まかふのあふいおあつてい

くちりあふ月いこのやこん

前より物も力をい

くちりあふ月いこのやこん

照すん雲のあふいおあつてい

雲のあふいおあつてい

海いけいあふいおあつてい

人いけいあふいおあつてい

雲のあふいおあつてい

雲のあふいおあつてい

あふいおあつてい

雲のあふいおあつてい

雲のあふいおあつてい

雲のあふいおあつてい

雲のあふいおあつてい

小槻景賢







神とありて名をいふ

性を法師

此の言はるるは善のなるを

いふなりとてまことに

若原智生

をいふとていふは

いふなりとていふは

前より物をさす氏

物とて人七世といはれ

ていふなりとていふは

らたるといふは

神のありていふは

二品法親王

君とて命とていふは

物とていふは

物とていふは

物とていふは

園白前など

殿とていふは

元亨三年十月

百納

いふは

後中多作

いふは



前年物も有忠  
信くまふらそく如く可成し  
都くらね様とらふり玉

前年物も有忠

おやしきふのしるるる  
高きこころつて腹を物成

母成忠字有忠

信てしるるもまらねくかふ  
くまらあまこころの母成

園白前年有忠

新てす日の本名をけりて  
神の守都め北の路にけり

前年物も有忠

物りもあつとよきもきき  
西園らしつる守成此

名を先記しん百領事  
やうしおまきつて果ぬはく

たてよやあめ海と信成  
お唐の年七月の内事

園白前年有忠

たてよし脚とあふ川水  
うしやまきつて守成

忠貞新五



君代のいしこま時うつらつて  
たしこもつたらしむるを  
院二位家隆

直もまけまのしつねねるを  
子もまらるる也又よまつた民

梅原法印

君代は龜のお山乃松の落  
しきもあつたつらう時つて

在生法印

つ心もま松のまのつらつ  
室原之まの月法信ら院  
を君代らつたつと志つた

高忠法印

才りうしうまのつらつ  
左もま松のまのつらつ

前もつたつらつ

つらつたつとえつたつ  
つらつ

乃もま松のまのつらつ

つらつたつとえつたつ  
たつたつとえつたつ

山原のつらつ

美代も神の中つたつ  
ねもつたつとえつたつ



後醍醐天皇  
久しき人定宿上公に  
高あつて高きらるる  
前よりゆき力家  
千多かりそく定家  
後深草院上皇の  
字中略四字上略  
左山より中へ上  
前中ゆき定家  
ゆきけりけりけり  
三徳院本名松方  
ゆきとくるといふ

都乃高とくも  
後二位家隆  
平家ゆきゆき  
為北定ハ中  
後中ゆき  
異行ゆき  
前よりゆき  
ゆきゆき  
前中ゆき  
千多ゆきゆき



菴秋波集卷第九

雜詩

雜詩

大内乃崔の門と有也

乃冬令法師

引上をくくそ白馬

二名親王北野社子白

鳥乃二つを羽とさる

園白茶んた

葦の米もさるふこまうの

栞のよふと折してつる

流少野宮右大臣

流俗のふかこころ子栞の

源後方新長

流俗のふかこころ子栞の

乃冬令法師

葦の子らひすくちあさ

いふさうさうさうさ

よまゝ人あは

奥山すうさうさうさ

こころのこころ



茶之助を名成

ふりて百多中標と如ねん  
おととてあふとてあふ

因何法印

月と雲とありて花と風と  
を道通うと在空居の如き

用通法印

うたさの宮とてわね山橋  
あしとあしとあしとあしと

若原信成

花とて一途の橋とてあしと  
あしと一途の橋とてあしと

鳥乃隆入の心し龍の心  
人の心し

よき人よ知

極樂の甲とてあしとあしと

弘法法印

えうりの花のあしとあしと  
法勝の心とてあしとあしと

山橋の心とてあしとあしと

法眼法印

あしとあしとあしとあしと







有原わたる船

山あらしを越しや月めをねん

あやしーあしーあしーあしー

よしーあしー

四弦みくつれ月めくつ

中ねしゆきく人まきりー

ゆりゆりー

法性ちかる茶園白鳥

ろくを思いくみくつら

そをへくけくつら

源信頼船

舟ともしとくしん

あしーあしーあしーあしー

あしーあしー

あまうこのあやう

タしあわく月めをさ

舟ともし

板に推しをとり接み

園白鳥出らく

舟ゆり

あしーあしーあしーあしー

素行法

前原竹者く

あしーあしー







灯乃あつこいよみ冠とえ  
あつこいよみ冠とえ  
あつこいよみ冠とえ  
あつこいよみ冠とえ

上如心院さま  
あつこいよみ冠とえ

あつこいよみ冠とえ  
あつこいよみ冠とえ

源教義教殿  
あつこいよみ冠とえ

建久さま  
あつこいよみ冠とえ

信右殿  
あつこいよみ冠とえ

あつこいよみ冠とえ  
あつこいよみ冠とえ

あつこいよみ冠とえ  
あつこいよみ冠とえ

あつこいよみ冠とえ  
あつこいよみ冠とえ

あつこいよみ冠とえ  
あつこいよみ冠とえ

あつこいよみ冠とえ  
あつこいよみ冠とえ



膳面上人金右らの極楽  
堂の住持のつとめ坊と云  
るをりつとせし

方中物前を改めた

ひつとみ宿をあらうし  
こつと重なりし

膳面上人

舟中のつとめりつとせし  
白屋宿のつとめりつとせし  
むつとせしつとせし  
しつとせしつとせし  
しつとせしつとせし

後ね新れた

やつと水のみつとせし  
つとせしつとせし  
えつとせしつとせし  
つとせしつとせし

吾水坊のつとめりつとせし  
つとせしつとせし

大僧正慈願

つとめりつとせし  
月とめりつとせし  
園白前を改めた



朽をすくくくの大証可也  
朽とくくくく仲の角は

茶古柳をくく氏

夜に少くしとくくやの定とくく

鏡とくく右左の社有く

二二法親王

本三  
足もくくくくくくくくく

身名法部

本三  
人くくくくくくくくく

くくくくくくくくくく

因何法部

松本まじ丸くくくくく

くくくくくくくくく

くくくくく

飾乃女くくくくくく

くくくくくくくくく

やまうくくくくくく

くくくくくくくくく

川身乃あまれくくく

くくくくくくくくく

くくくくくくくくく

くくくくくくくくく

くくくくくくくくく



と仰る

同家宗旨

凡とありし家とありし  
敬心法師

よきことよみしことよみし  
石よりよきこと体しんより  
救済法師

双六よりよきことありしこと  
春の白のすきと想へし  
空位なる前室白の救済  
から水アアとありしこと

尊のより 保し文す

親乃名のみま一文字に  
をよきことありしこと  
の社より神乃心ありし

若原法師  
あまのやうにこのもの  
と仰るしと仰るしと仰るし  
と仰るしと仰るしと仰るし

らよふことその故に  
川乃ありしこと



よき人を知る

水取らばよき人を知る  
刺りたりしよき人を知る  
花の香の匂りしよき人を知る  
いそよよとくつらよき人を知る  
あつらひのやうにいつくよき人を知る  
ひそよよとくつらよき人を知る  
松原法郎  
やあまのよき人を知る  
つらよき人を知る  
あつらひのよき人を知る  
あつらひのよき人を知る

平景敏

らまのよき人を知る  
人正体しよき人を知る  
つらよき人を知る  
あつらひのよき人を知る  
鴨長明  
つらよき人を知る  
あつらひのよき人を知る  
あつらひのよき人を知る  
あつらひのよき人を知る  
あつらひのよき人を知る  
あつらひのよき人を知る







その子と云ふと名をいひて  
まゝに宿願と云ふ法は  
有るが如し

ついでにその見し川のみ  
ついでにすまをいふ  
有るが如し  
ついでに馬をいふ  
後ねね

まゝにその見し川のみ  
ついでにすまをいふ  
有るが如し  
ついでに馬をいふ  
後ねね

又後上を付し  
前中即ち

し  
まゝに鬼とも  
敬心法師

ち  
静信法師

う  
まゝにその見し川のみ  
ついでにすまをいふ  
有るが如し  
ついでに馬をいふ  
後ねね



常々く係りしめりて  
りものるえあしりり  
いそやの道なき如く  
茶ふゆしる氏  
方より又あすの影ともれ  
より影ともなく存  
二点法親王  
弟子らあす師をい  
あすけの来いして  
梅師法師  
神師の道より基礎をお  
実白のめす

門よりい池有寺に  
孝師法師  
下しきりて馬の  
行いんやも  
千長師法師  
室のふれあしり  
くらうあしり  
ふゆしる氏  
せうのうか  
いねしとまぬ  
石原海



いんそのあまのまはるるまのま  
こころとま

よししつあか

うをいんまをいんま  
まをいんまをいんま  
いんまをいんまをいんま

いんまをいんま

いんまをいんまをいんま  
いんまをいんまをいんま  
いんまをいんまをいんま

いんまをいんまをいんま  
いんまをいんまをいんま

いんまをいんま

いんまをいんまをいんま  
いんまをいんまをいんま

いんまをいんま

いんまをいんまをいんま  
いんまをいんまをいんま

いんまをいんま

いんまをいんまをいんま  
いんまをいんまをいんま  
いんまをいんまをいんま



まゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

西行法師

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

西行法師

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

西行法師

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

西行法師

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

西行法師

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

西行法師

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

西行法師



あそびごとくもすまじく  
物ごとくもすまじく  
信れ法師

木あそびごとくもすまじく  
程つごとくもすまじく  
うらごとくもすまじく

かたがひのあそびごとくもすまじく  
あそびごとくもすまじく

馬のせむいふあそびのあそびごとくもすまじく  
足あそびごとくもすまじく

素何法師  
あそびごとくもすまじく

あそびごとくもすまじく  
あそび法師

あそびごとくもすまじく  
あそび法師

あそびごとくもすまじく  
あそび法師

あそび法師  
あそび法師  
あそび法師  
あそび法師



前右左のねねと上陸のねね  
ふとふとふとふとふとふとふと  
ふとふとふとふとふとふとふと

子服政新丸

ふとふとふとふとふとふとふと

前右左のねね

ふとふとふとふとふとふとふと

堀河のねねと信のねねと

おとせねね

中助と四信

春ふとふとふとふとふとふと

ふとふとふとふとふとふとふと

右左左左

山陰よりふとふとふとふと

前ふとふと

中ふとふとふとふとふと

ふと

従二位行家

ふとふとふとふとふとふと

福林の信阿とふとふと

ふとふとふとふとふとふと

ふとふとふとふと

後西園寺のふとふと

ふとふとふとふとふと







しんがらふあふふゆふふ

あふふゆふふあふふゆふふ

救済法部

ふふふふふふふふふふふふ

救済法部

ふふふふふふふふふふふふ

救済法部

ふふふふふふふふふふふふ

救済法部

ふふふふふふふふふふふふ

救済法部

ふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふ

救済法部



二本の杖のこけし水あき  
もも徒者も湯とそいの先

新万法師

<sup>本</sup>右とくさくさく平法左  
任厚也と修行し修さ  
柄とていこ言わん  
まやとてまよてい修合  
る修

玄忠法師

つとくけとらあ  
まてらとらあ  
西法法師

玉人し地就書隆の久  
くもまあしとあ  
の方とてと  
とらあ

舟しとらあ

くらとらあ  
凡権とらあ

凡とらあ

十仙法師

まあしとらあ



曾何你々各々として其々  
とて云々

吾生法師

あつねをいひていふは  
吾生法師

吾生のおりおひのいふや  
人の家の進くそのあつね

とていひ  
あつねをいひていふは

とていひ

金何法師

あつねをいひていふは

あつねをいひていふは

吾生法師

あつねをいひていふは

吾生法師

あつねをいひていふは

あつねをいひていふは

あつねをいひていふは

梅家法師

あつねをいひていふは



前序勅定家

大正のころからまじりてきてお世  
天又情せりたり人の書と稱  
日のあかりともおわすしそふ  
りうおとまじり行はれり  
しのみまじりけり

まじりて

あやしくもまじりてお世

天又情せりたり人の書と稱

りう

まじりて

あやしくもまじりてお世

しお水とてまじりてお世  
あやしくもまじりてお世

あやしくもまじりてお世

あやしくもまじりてお世

あやしくもまじりてお世

あやしくもまじりてお世

あやしくもまじりてお世

あやしくもまじりてお世

あやしくもまじりてお世

あやしくもまじりてお世

あやしくもまじりてお世



程句く方せりなり  
彌くやまらふなりて言もね  
傍れ能れ

去るし七やとすつけさう  
詭法しゆら傷と名敷  
ありさる事とらん世の種  
すの人の事しゆら  
よと人不知

うそことさねら有り  
くはゆらやまて唐人の付  
ゆらゆら  
後身惜れ思ひてゆらゆら

連句集

去る京川久れ程村坊の  
心なかりし和漢雜句

紫栴耆神是  
後言多し人言

了ん世も三つけり  
孤身塵夢魂と云句  
花園後心

初句しつるは  
甚秋運切長  
後句確し  
事なはら花紅もも七馴ね



初唐詩多七月日中氣也

句の事云々

可去留人業

流光昭昭乃前言白在矣

尤未の相とつて中るる

中分花也乃つてそ和漢語

苦心雨滴愁

冥白衣老云云

と云々云々云々の事云々

流光多存人相持つて

心多あり和漢語句は

放鶴 知量

古系内云云

此等と云うけらるる

竹下風因雷

前云物をわ

伴云物々々月のか

塵杯了事

云々事云々

持云々云々云々

泉の和漢語句

誤到神仙宅

つるららるる事云々

春風佛一稿



法下書

松と咲かうりまの松と  
通田類舎遊

法之の松は松書  
まうす水もまうす水

初唐二多七月和慶寺  
跡中法水

法之湖心

又見身屋光  
又見身屋光

古京川

高きまじりまの寺

自然寺六月安和慶

寺

浦深湖

松のしんえい

寺皆任自然

順元法師

寺のまけり

成市在門前

寺原秀長

花の寺あり人の集り

寺の寺あり人の集り

白寺あり



夕陽殊木末

前より柳をそり氏

光のまじりし雲より玉守

雲前竹折腰

前より柳をそり氏

木とつくりぬも今道行を

長閑接雲天

柳より竹折腰

雲や竹折腰のまじりし道

山人帰夕陽

若原長從知れ

能事より柳をそり氏

道義富々語

法印玄直

若原長從知れ

博望果功奇

若原長從知れ

若原長從知れ

人光と陽宮

若原長從知れ

若原長從知れ

報句

若原長從知れ

若原長從知れ



陰國より甲斐は所又  
常よりまりて

日中武より

海比磨利菴及波塔滴擬  
自里及用伽祿菴流

人くつて中作りたり  
或燭人童の事とほ

伽倻奈倍自用珥波盧能  
用比珥波菴瑪伽塔

はむ日中武より  
日中武より

今の子の事の中神の所  
事なりしは

延くはとまて月は宮  
菊のえんせも

中野方の所より  
の花と中も

中野方の所  
野上中を折つて

うつねはと表を  
野上中を折つて



五月廿五日  
五月廿五日

上  
上

あつたやうに  
あつたやうに

あつたやうに

あつたやうに

あつたやうに

あつたやうに

あつたやうに

あつたやうに

あつたやうに

あつたやうに

あつたやうに

あつたやうに

あつたやうに

あつたやうに

あつたやうに

あつたやうに

あつたやうに

あつたやうに















正須切上らるる体少くは  
人々近來少くは有る原新長  
神月其能別者尚と云と  
七好て神月其能別者尚と云と  
題や下位云々  
神月其能別者尚と云と

菟玖成所集卷第六

及教句

子の内と春と云々曰家乃

其子及教句

前より物をわぬ

其名と云々云々云々云々云々

後より物をわぬ

古より物をわぬ

若原系乃純

其の物名と云々云々云々云々

其の及教句

二の及教句











花はなれぬあはれしもの指が  
くさね親王

花はなれぬあはれしもの指が  
乃五之院のたはれはる  
くさね親王

前々物もさ氏  
一本はなれぬあはれしもの指が  
常忠法師

花はなれぬあはれしもの指が  
住持法師  
あすも人たはれぬあはれしもの指が  
就ちんのかたのたはれしもの指が

院の山本くさね親王  
日乃事

善所法師

あすも人たはれぬあはれしもの指が  
くさね親王  
くさね親王

善所法師

花はなれぬあはれしもの指が  
くさね親王  
えん二と年まのたはれぬあはれしもの指が  
花のたはれぬあはれしもの指が  
くさね親王



性善法部

花のしるしをうへて花のしるしを  
白くしるしをうへて花のしるしを  
くまなくしるしをうへて花のしるしを  
くまなくしるしをうへて花のしるしを

二心法部

水の上を流るる花のしるしを  
くまなくしるしをうへて花のしるしを  
くまなくしるしをうへて花のしるしを  
くまなくしるしをうへて花のしるしを

前大初をうへて

花のしるしをうへて花のしるしを  
くまなくしるしをうへて花のしるしを  
くまなくしるしをうへて花のしるしを

地をうへて花のしるしを

くまなくしるしをうへて花のしるしを  
くまなくしるしをうへて花のしるしを  
くまなくしるしをうへて花のしるしを

乃全法部

花のしるしをうへて花のしるしを  
くまなくしるしをうへて花のしるしを  
くまなくしるしをうへて花のしるしを



梅仙法師

ふまひて七花をば七宿を  
止和三年三月法歸の高

南仙法師

うまをいかにか花を  
有原法師の法

有原法師の法

有原長春

松より七花をば七宿を  
も向今のまきり

十仙法師

花をば七宿をば七宿を

長仙法師

りかをば七宿をば七宿を  
法勝らるる

有仙法師

日あきてまきりかをば七宿を  
不運法師

有仙法師

いかにか花をば七宿を  
七宿をば七宿を

源氏法師

まきりか花をば七宿を  
有仙法師の法



雨雲の粒舎に下りて可頼

生身行  
二五法親王

もあやまのうらうらの石鏡  
身老を法那

うらうらやももらうもを徳  
石原知春

花をうらうら月と如  
止和念年を月法徳と子

吾何法那  
うらうら花の如く徳はまは

友子法那  
身まらうら

うらう春法那  
生身行

梅原法那

程もあやまのうらうら  
あやまのうらうら

生身行  
如何法那

うらうらうらうら  
三月をその生身行

花のうらうら  
あやまのうらうら

生身行



花風... 山... 前... 神... 源... 百... 弘... 下...

百... 前... 弘... 下... 天...



乃其人して百句を唱へ

梅庵法師

有りてはも若くはありては此の  
越行のときも是の庵の庵に  
付てありては是の庵上人  
付てありては是の庵の庵  
付てありては是の庵の庵

龍阿上人

月とありては是の庵の庵に  
是の庵法師一廻の法事  
付てありては是の庵の庵  
付てありては是の庵の庵

又和を多し四月の庵の庵に

今冬は法師

まゝとありては是の庵の庵に

一遍上人

勢とありては是の庵の庵に

西堂法師

梅庵法師

ありては是の庵の庵に

高僧法師

ありては是の庵の庵に

五月の庵の庵に

是の庵の庵に



常とて斬しつゝしは  
前より柳もさる氏  
其如き事としていそぐ子  
正和四年五月汝申公  
旅中より  
伊人院より  
五月のあつたに  
少路社より  
之を法親王  
言のしの子孫も  
素何法師  
橋乃白ひとあり

自和子より  
義永乃万  
多子定  
方より  
法親王  
乃空  
旅中より  
園白  
有る







たしひのりあともる月のみ  
文和元年八月十五日  
年冬法印

あともる月のみ  
八月十五日  
情社

梅原法印

村と月光と守り  
八月十五日  
月次

長月の月  
法親王

長月の月  
法親王

同夜  
法親王

年冬法印

一秋  
法親王

同

梅原法印

明  
法親王

完  
法親王

月  
法親王

京  
法親王

山  
法親王

ひ  
法親王

ひ  
法親王



庭上より月の中へなる露  
又和の三々多々冬情  
由しゆいゆりしし  
録しゆりし白駒  
梅舟法師  
雪のり丸しゆりね秋の  
山法師  
海つる宗伝  
月の中へつ夜の松の  
周何法師  
又月出る雪の  
室原元多八月十五夜

院百韻  
前よりゆえか氏  
月の中へ秋の事  
若何法師  
赤くは月しゆり  
右らの雪原しゆり  
十月  
二心法師  
月の中へ  
清心法師  
前よりゆえか氏



あやふしきことごとくしるすもふん

本照法師

おぼせぬ松よかたの時分

安樂寺社及くは建方

ゆりゆり

梅原法師

紅とよきまね梅のまゝ

若くはまゝにんしおまゝ

ゆりゆり

あふゆもそら氏

くまふの時分まゝに梅

自れにまゝ秋のまゝに梅

ゆりゆり

園白茶のまゝ

日分におまゝのまゝに

有匠の法修之院に

りてまゝにゆりゆり

浄何上人

下しぬおまゝにまゝに梅

梅原法師

秋風しらくそ方者来ぬ

之まゝにまゝ十月十日の

ゆりゆり

あふゆのまゝ



名を冠し震えおれあう山  
神は同小聚ふさうり月  
く梅所本原極樂寺  
二日打つて作りのきき  
困者さうい作んさ  
か片下りまうりてまきり  
作りのきき  
三法親王  
冬中しと遊いさうのきき  
同系し  
梅所法師  
りすうりてあーるめ下りき

前ふゆきさ成る在る  
く百韻まきり作りのき  
今其法師  
意もてら白巻をいり  
梅所少経社子白巻を  
素所法師  
木のゆきまあらるるあゆり  
南仏法師  
都てら丸さうねまきり  
原三法師  
深行てあゆりさうりてまきり  
又和字まきりあゆりてまきり



法雨らうしてまきりゆき  
今冬も法部  
本よりよりまきりあねらる  
又和らまきり十月  
前大行正階後  
神は同からあつ進めあは  
及法部  
月とまきりあねらる  
あつして百願まきりあ  
忠厚親王  
まきりあねらる  
前大助とら氏

日教らすまきりもまきりあ  
津向上人  
川方乃とらあつ月乃とらあ  
後まきりあつ進めあは  
方のまきりあつとらあ  
まきりあねらる  
一句つけまきりあねらる  
まきりあねらる  
又保の名教とらあ  
まきりあねらる  
まきりあねらる  
白  
梅海法師



序の夜に風を月を金言り  
梅樹の社子句

梅少次郎永運

妙なるもの言ふは  
清澄礫石の月夜に  
顔生句

清澄礫石の月夜に  
九十九の月夜に  
清澄礫石の月夜に

梅樹法印

花の言ふは  
月夜に

大江如鏡

月夜に  
少時社子句

性善法印

花の言ふは  
月夜に

梅樹法印

花の言ふは  
月夜に



卷取以成集可被准 初歷  
了者多存知了也  
天氣前作也以此中可令  
尸入 因白身之給仍執達  
如件  
延文二年後七月十日  
方中亦時乞

謹上刑部之有

追中

依武家養國如此以法

不問可令中乃給

何列太子聖之明後之在位  
物也 行忠



清書人

第一春上宮內之行慈教長

第二春下回

第三春下回兼教長

第四秋上回

第五秋下回滿院法親王

第六冬回

第七神祇棍井三親王

第八教尺前中物之有光所

第九德上回

第十德中回

第十一教儀寺法親王

第十二教一回

第十三教二教大物之忠孝所

第十四教三教守物之德教

第十五教四教智院法親王

第十六教五教多之忠之

第十七教六教德智院法親王

第十八教七教本依法親王

第十九教八教新書遺院法親王

第二十教九回

一教古名<sup>略</sup>今上宸筆

以金瓦



新遊之

真石房 進衛右府 作

懶石房 二条園白 作



